

氏名(本籍)	ナタリー・シャレ (ガボン)				
学位の種類	博士(文学)				
学位記番号	博甲第5577号				
学位授与年月日	平成22年12月31日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	Images et Pouvoirs de la Mère dans la Pensée Bwitiste —Pour une revalorisation de la sagesse féminine (ブイティの思想における母のイメージとカ-女性の知恵の再評価のために)				
主査	筑波大学教授	博士(文学)	川那部	保明	
副査	筑波大学准教授	博士(哲学)	廣瀬	浩司	
副査	筑波大学講師	博士(哲学・経済学)	佐藤	吉幸	
副査	筑波大学助教	博士(社会学)	ブリッソン、	トマ	
副査	宮崎大学教育文化学部 准教授	博士(政治学)	岩田	拓夫	

論文の内容の要旨

序論

赤道アフリカ直下のガボン共和国を中心に広がる Bwiti は、これまで研究者たちに、男性から男性へと秘儀伝授される男性の宗教とみなされてきた。しかしその宗教思想と宗教行為を細かく分析すれば、たとえば Bwiti の秘密を最初に知ったのは女性であったとされるように、この宗教を根幹で支えているのは女性の力、それもとりわけ生をもたらす力 (fécondité) としての女性の力、という概念であることが理解される。＜男性の宗教＞という視点のもとで、女性＝母性の fécondité をベースとした思想としてのこの宗教のもつ意味は、隠されてきたことになる。本論では、チェ・カンタ・ディオップの主張したブラックアフリカの母性文化的一体性の文脈から、Bwiti の思想が、女性のみならず人間そのものの内包すべきひとつの価値として母性を提示していることを明らかにしたい。

第一部：Bwiti は死者に関する崇拝と教えなのか？

Bwiti の実態について書き残している研究者の傾向は、大きく2つに分類される。ヨーロッパ系の研究者と、アフリカ系の研究者である。前者は Bwiti を死者崇拝・先祖崇拝の宗教とみなす傾向にあり、後者は Bwiti を知の伝授のための集団とみなす傾向にある。だが、後者の場合も、伝授される知は死者＝先祖から伝えられるのであるから、ヨーロッパ系・アフリカ系いずれの研究者も、Bwiti 思想の中心に死者＝先祖との関係をおいていることには変わりはない。

実際、Bwiti にはその原初の形と目されている Bwiti Disumba のほかにも、Bwiti Misoko (医療行為的色彩が強い) や Bwiti Fang (キリスト教思想の影響が見られる) など様々な支脈があるが、いずれの宗教行為にも共通する要素として iboga (幻覚性の植物) の摂取や mugongo (一弦弓)、ngombi (八弦ハーブ) といっ

た楽器の使用などがあり、それらはすべて死者たち＝先祖たちの不可視の世界へと参入し、現実の世界では得られない知を得るためのものとされている。すなわち、Bwiti はどの支脈の研究においても、死者＝先祖と出会う宗教であり、死者＝先祖から与えられる知の伝授の宗教として捉えられているのである。

しかしこのように、死者＝先祖との関係においてのみ Bwiti の宗教思想を捉えてしまえば、すべては過去（夜、闇）との関連でしか位置づけられないことになり、Bwiti 思想の内包する未来への指向の可能性が隠されてしまうことになる。とりわけ、アフリカ系研究者（彼らの多くは実際に Bwiti の秘儀伝授者である）の伝える Bwiti の思想と宗教行為を詳しく分析すれば、そこにわれわれは、単なる死者＝先祖との関係以上の、生に対する積極的な思想を見て取ることができるはずである。

第二部：母についての沈黙、死者と死をベースとして語られる Bwiti の限界

死者＝先祖との関連で Bwiti を位置づけると、秘儀伝授者（Bwitiste）は呪術師（sorcier）とみなされ、超自然の世界は夜の闇の世界とみなされる。そこからもたらされる知は、われわれに、生へと積極的にかかわらせるような道徳的・教育的方向性を示すものとして受け止められることはない。しかしそれは、Bwiti の死者＝先祖志向性による解釈が（加えて Bwiti の男性性という思い込みが）、この宗教のもつ世界との関わりにより本質的な面を見えなくさせているからではないか。

実際、どの支脈においても Bwiti の言い伝えには女性の形象が数多く現れる。Bwiti の知を最初に得たのは女性であって男性はそれを事後的に奪ったにすぎず、従って Bwiti の出発点は女性なのだし、男性を導いて子供を誕生させるのも、死者の旅に付き添うのも、死者の蘇りを導くのも女性である。そのことは、Bwiti の宗教行為においても反映されていて、Bwiti の原初形態とされる Bwiti Disumba においてこそ宗教儀式は男性のみで行われるもの（しかし女性のためには別個に Nyemba と呼ばれる儀式が行われる）、Bwiti Fang や Bwiti Misoko の儀式には男女双方の参加のための場がしつらえてある。そして儀式の進展をみると、そこに現れる女性性はとりわけ、生み出す力と保護する力（pouvoirs procréateur et protecteur）として捉えられていることがわかる。この、女性性の側面が、ひとつには Bwiti を男性による秘儀伝授宗教とみなすことにより、またもうひとつには死者と先祖崇拜のみに結びつけることにより、隠されてきたのではないか。この、隠されてきた側面を、男性性に対立する女性性の視点からではなく、母性＝féconditéをめざす人間（Homme）そのものの視点から読み直すことで、Bwiti を、過去や死者だけでなく、未来や生に関する思想として再解釈できるのではないか。

第三部：母の概念のもとに Bwiti を理解すること

母性の概念を中心に据えて Bwiti を理解することが、死者や死、夜や闇や呪術の限界から Bwiti を解き放ち、その思想を生へ向かうものとして解釈しなおすことを可能にする。

母性の中心化は、Bwiti 思想の内的読み直しだけでなく、ブラックアフリカ文化の文脈によっても正当化される。古代エジプトには Ba の思想があった。Ba とは母なる女神 Hathor のかたちをとった神の魂であり、生と再生、混沌に対する正義と調和の勝利をもたらす。また、マリにも Ba は、神の内なる女性的力を際立たせるものとしてある。そしてガボンでも、Ba は Bwiti の儀式における赤い粉を意味するが、この粉は生へと向かう母性の力と結びつけられているのである。

このような母性の文脈に置き直して、Bwiti における母性の有り様をみなおしてみる。

Bwiti Fang の知のベースには、Evus という精霊の神話がある。この精霊は二面性を持っており、Mauvais Evus が sorcière の側面を負い荒廃と不毛をもたらすのに対し、Bon Evus は生をはぐくみ護る側面を担っている。この Bon Evus を選ぶという行為が母性の根本として想定されるのであり、その選択をなす人が、男性・女性にかかわらず、nya-mot（homme-mère、人-母）と呼ばれうるのである。

また、Bwiti Misokoにおいては、月と水によって表象される Ngonde という精霊が、生をもたらすためにたたかう力という、母性をあらわすものとして現れる。

これらの母性は、ふたつの力を根拠としている。Vision の力（死者の invisible な世界を見てそこへの旅を再生へとつなげる力、invisible な世界をみて生を阻害するものと戦う力）と、fécondité の力（正義と調和を維持して生を存在させ護る力）。これらの力を備えた存在の形象が、Bwiti Fang では nya-mot となって、Bwiti Misoko では Ngonde となってあらわれているのである。

かくして、男性の宗教、死者の宗教とみなされた Bwiti は、その根底において母性としての女性性に支えられているのであり、さらに、その女性性は単に女性固有の概念としてあるのではなく、男も女もともに実現すべき homme-mère すなわち Homme juste の姿を提示しているのである。

結論：Bwiti の再発見

Bwiti の中心となる概念は、母性とその力である。そのように考えたとき初めて、女性をもたらしたとされる Bwiti の知は、その生へと向かう力 (pouvoir de la fécondité) を十全に認知され、その知は正義と調和と結びつくのであり、現代における道徳的教育的意味をもちうるのである。

審査の結果の要旨

Bwiti という宗教を赤道直下アフリカにおいて男性によって行われているという二重の意味での特異性に押し込める従来の見方を脱却し、より普遍的な女性性＝母性という観点を前面に押し出し再解釈を施して、さらにその母性を女性のみならず、男性にも女性にも共通にあるべき属性として捉え、もってアフリカの一地域の宗教思想のエッセンスをブラックアフリカ全体、ひいては現代の一般的価値へと積極的につなげようとする、野心的な論文である。アフリカの一地域宗教に新たな読みの可能性を示し、もって、発展と混乱が背中合わせのアフリカから現代にむけてひとつの価値観を提示する試みとして、成功していると思われる。

他方、個々の内容面について、いくつかの指摘がなされた。すなわち、古代エジプトまで視野を広げたくアフリカ文化の文脈で Bwiti を論じることの必要性および正当性がいまひとつ明確になっていないのではないか、Sagesse, Justice, Harmonie, Beauté 等の用語（概念）による叙述は、それらの概念の内容が独自に定義されないなら Bwiti を西洋的倫理に落とし込んでしまうのではないか、Bwiti における儀式の実際や語りの歴史の変遷についての分析が不十分ではないか、Bwiti の儀式に関する写真等のイメージを掲載すれば読者の理解をより助けるのではないか、等である。

今後は、以上の指摘に留意しつつ、これまで不十分であった現地調査を重ねて Bwiti の宗教思想と行為をより具体的な個別相として把握すること、その個別相が現在のガボン社会（ひいては多層的なアフリカの社会）の状況とどうせめぎ合っているのか、その状況に対して Bwiti はひとつの土地の思想としてどのように内側から積極的な視点を提供していけるのか、その視点はどのような意味で普遍性へとつながるのか、を問うていくことになろう。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。